

退院時サマリーの効果的な活用による後方支援施設との連携

施設名：稲次病院

発表者：坂東 孝哉 (看護師)

共同演者：稲次 正敬 (医師) 湊 省 (医師) 高田 信二郎 (医師)

稲次 圭 (医師) 稲次 美樹子 (医師) 豊川 友美 (看護師)

浦岡 稔 (看護師) 空田 麻友美 (看護師) 阿瀬川 綾華 (看護師)

【はじめに】

人口の高齢化とともに、慢性疾患や合併症をかかえ入退院を繰り返す患者が多くなっている。当院でも同じような現象が見られる。そこで当院には後方支援施設がいくつかあり、今回は特別養護老人ホーム藍寿苑(以下藍寿苑という)に焦点をあてた。実際に先行文献では「退院時サマリー用紙の改善と活用を試みた結果、スタッフの継続看護の必要性の意識づけとなり、継続看護の糸口となった」と示されている。看護サマリーに対する取り組みを検討、改善策を考え、再発の予防に繋げることを目的に取り組んだので報告する。

【対象者】

藍寿苑スタッフ(看護師6名 介護職員32名 その他2人)、藍寿苑から入院された患者

【研究方法】

- ・後方支援施設での退院時サマリーの理解度、課題等の実態を把握する。
- ・現状を明らかにし、施設間で出来ること、改善策を検討する。
- ・申し送り内容など情報共有のための意見交換を実施、看護サマリーについてのアンケートを藍寿苑スタッフに取り、意見を取り入れ病棟間で周知する。
- ・藍寿苑で働く介護士、看護師の視点から改善点を考え退院時サマリーに取り入れる。
 - ・アンケート後に入院数に変化が見られたかデータをとり考察する。

【結果】

アンケート前の入院数15人。アンケート3か月後12人、1年後15人という結果になった。サマリーを十分考える人は80%。不十分と考える人は10%。見ていない人が10%であった。見ていない10%は全て介護スタッフであった。理由として「専門用語が多いと介護職に伝わらないことがある。」等の意見が挙げられた。このように退院時サマリーは介護スタッフや、その他のスタッフにとってはわかりにくく、不十分と感ずることがあった。今回の研究では入院数は横ばいであり著明な減少はみられなかった。

【考察】

スタッフの中には看護サマリーを見ていない人もおり情報の共有が不十分であったと考えられる。看護の継続性ということでは、「患者の入院時と退院時にはどのような看護の内容が継続されていくのか」ということ、つまり病棟と後方支援施設との連携が大切である。今回施設の方へのアンケートの結果から改善策の検討、改善を図り、円滑な情報共有を送ることができた。本研究に置いて入院数が減少したことは、対象の違いがあることから有意な結果であるとは言い難いが、今回の取り組みが今後の看護業務の一助になったのではないかと考えられる。長期的に継続し、患者側にとって入院・退院の全期間を通じ、一貫した看護が受けられるように調整、連携が必要である。

引用・参考文献

- 1、田張紀子他：退院時サマリー用紙の活用を通して看護の継続性を考える。
- 2、伊藤雅治：認知症グループホームと訪問看護ステーションの今後の連携の在り方に関する調査研究事業